糖尿病女性の喜びを生んだ医師

「糖尿病と妊娠」の分野を創設

大森 安恵（おおもり やすえ） Yasue Omori

海老名総合病院・糖尿病センター センター長、東京女子医科大学 名誉教授

Director of Diabetes Center, Ebina General Hospital, Emeritus Professor of Tokyo Women's Medical University

高知県安芸市出身。1956年東京女子医科大学卒業、同大学第2内科に入局。1961年から特に糖尿病と妊娠をテーマとした臨床分野の研究を推進。医局長・講師・助教授を経て同大学糖尿病センター教授。1991年糖尿病センター所長兼主任教授となり、定年退職後は名誉教授となる。その後、東京女子医科大学特定関連病院・済生会栗橋病院副院長を歴任し2002年海老名総合病院（旧東日本循環器病院）糖尿病センター長を務める。若い糖尿病患者さんたちに勇気を与える本「彼岸花の鎮魂歌」（時空出版）その他学術論文、共著書多数。

推薦者 **内潟 安子** 東京女子医科大学内科学（第三）講座・糖尿病センター主任教授　糖尿病センター長

大森安恵氏は、日本の医学界にかつてなかった「糖尿病と妊娠の臨床および研究分野」を創設し、当時「糖尿病があれば妊娠してはいけない」と言われていた女性患者の暗い人生を、子どもを持つことのできる、明るく豊かな生活様式に変えた。

1960年代まで糖尿病患者は、「妊娠は母子共に危険」という理由から妊娠しても人工流産させられるか、母体は糖尿病昏睡、子どもは子宮内胎児死亡となり悲惨な状態で終結するのが常であった。大森氏は、自身の悲しい死産経験をきっかけに欧米で「糖尿病と妊娠」について学び、「良好な血糖コントロールならば、妊娠・出産が可能である」ことを日本全域に示しつつ、1964年、東京女子医科大学病院では初めての糖尿病妊婦の分娩を成功させた。妊娠を希望する多くの糖尿病を患う女性が全国各地から女子医大を受診するようになった。

その後、大森氏は「糖尿病と妊娠」の分野を日本全国に普及させ、さらに医療レベルを上げるために、1985年「糖尿病と妊娠に関する研究会」を立ち上げ、代表世話人として良好な血糖コントロールの必要性を主張。周産期死亡率を11%から2%まで減少させた。また、2000年には糖尿病と妊娠の分野を医学会・コメディカルに浸透させるべく、研究会を「日本糖尿病・妊娠学会」にまで発展させ、2005年まで理事長として、この分野の研究と一般病院の治療レベル向上に心血を注いだ。

現在、血糖コントロールが悪いまま妊娠した糖尿病妊婦から約10%の高頻度で奇形児が生まれることが明らかにされている。また、妊娠して初めて糖尿病が発見される妊婦は後を経たない。そこで大森氏は献血時に糖代謝異常の検査が施行できるように日本赤十字社に依頼し、2009年3月から年間500万人の検査が実施されるようになった。糖尿病の早期発見、ひいては糖尿病から母子を守る手段に役立つことが期待されている。

その他、1997年5月、女性で初めて日本糖尿病学会会長に就任。2007年2月には母子を糖尿病から守るためのスピーチを国連で実施。2010年12月にはWHOにおける妊娠糖尿病ガイドライン作成に選ばれ活動をするなど、女性の社会的地位向上にも貢献している。さらにヨーロッパ糖尿病学会のDiabetes Pregnancy Study Groupのたった一人の日本人メンバーとして、世界に向けて日本の研究データ発信に絶大なる努力を続けている。

■日本糖尿病学会会長に女性で初めて選出され、招聘演者とともに

■2011年3月、第6回糖尿病と妊娠に関するインターナショナルシンポジウムで座長を務める大森氏

■大森氏の自著・訳書